

2022年から23年にかけて春採湖周辺で確認したカラスの異常死 —デジカメ画像記録からの検証

樋田宏三郎¹、黒澤信道^{1,2}

はじめに

2022年10月から2023年3月まで、釧路市内の春採湖周辺においてカラス（ハシブトガラス、ハシボソガラス）の死骸を多数確認し、瀕死の個体も確認した。そのうちの一部は行政機関による検査対象となり、高病原性鳥インフルエンザ（以下、HPAI）感染であると確認されたものの、同一場所において継続して発見された死骸については積極的な検査は行われず、異常死の全容は記録されていないものと考えられる。今後の資料として残すため、この期間に記録したカラスの異常個体数について報告する。

状況と結果

2022年10月から23年の4月までの冬を中心とする期間に、釧路地方を含む北海道内各地で、野鳥のカラス類やオジロワシなどがHPAIウイルスに罹患して死亡したことが確認された。また同時期に、養鶏場やその他家禽を飼育する複数の農場でも同ウイルスによる発症が報告され、防疫のために数十万羽の家禽が殺処分されたことは記憶に新しい。

筆頭著者は、以前から個人で春採湖の周辺（春採公園）を毎週3回ほど歩き、野鳥はじめ各種動植物の観察を行ってきた。2022年10月5日に散策路脇で、珍しくカラス1羽の死骸を確認した。この後11月2日に再び死骸を発見したのに端を発したかのように、特に12月に入ってからは連日のように死骸や異常個体が見つかった。年が明けて2023年の1月下旬からは他動物による捕食やカラスによる共食が進んだのか、全身の残る死骸は見られなくなり、翼など部分的な死骸が見られたのみで死骸のカウントとしては少なくなった。その後3月上旬に再度小規模な発生があったと考えられる。確認した死骸の数はシーズンを通して40羽に上ったが、カラス類以外の野鳥の異常は見当たらなかった。

この間、釧路総合振興局の担当部署が一部の死骸を回収して検査を行い、このうち12月5日に回収されたハシブトガラス2羽が、野鳥でのHPAIの国内発生102例目であると環境省から発表された。その後はさらに死骸の確認があったにもかかわらず検査は行われなかったようで、3月

表1 春採湖周辺でのカラスの異常死確認リスト（注釈にないものは全て死骸）

年	確認月	確認日	羽数	備考	
2022	10	5	1		
		11	2	1	釧路総合振興局が12/5に回収
		4	1		
	28	1			
	12	1	0		
		2	1	総合振興局に異常死の発生を電話報告	
		3	2		
		5	3	振興局が10羽を回収、うちハシブトガラス2例についてHPAIと判明	
		7	1		
		9	4		
		10	7	ほかに瀕死のカラス1羽を確認	
		12	1	それまでの死骸を含めて4羽を個人で回収し処分	
		21	4		
		22	0	前日の4羽を個人で回収し処分	
26		1			
28	3				
29	0	前日の3羽を個人で回収し処分			
2023	1	1	1		
		2	1		
		6	1		
		18	1		
		19	2	前日分も含めて3羽を個人で回収し処分。うち1羽はハシボソガラス	
	3	5	1	振興局の担当者？が3/6に回収	
		6	1	個人で回収して処分	
		8	1	個人で回収して処分（対岸）	
		10	1	3/10回収のハシブトガラス1羽を環境省がHPAIと発表、春採湖かどうかは不明	
		合計		40	



写真1 11月2日死骸



写真2 12月10日死骸



写真3 3月8日死骸

10日に釧路市内で回収されたハシブトガラス1羽が211例目のHPAIであったと3月15日に発表された。本例も春採湖周辺での発生だったと考えられるが、詳細な回収場所は公表されておらず推測の域を出ない。

行政による回収・検査結果の発表とは別に、筆頭著者が独自で確認したカラス類の死骸、瀕死個体の数に関しては発見のたびに写真を撮影していたので、事後デジタルカメラの記録から日付と位置を確認して表1および図1の地図にまとめた。代表的な写真も掲載した(写真1~3)、これらの死骸等について重複してカウントした可能性はない。表には表れていないものの、具体的には2月10日に両翼のみの死骸、3月1日には頭部のみの死骸を確認し撮影している。図1には期間を通して死骸を確認した地点を示した。死骸が集中的に見つかったのは公園の北西部の狭い範囲であった。1例は対岸で確認したため地図には示しておらず、合計39地点となっている。特に死骸が目立った12月の初旬に関しては、日ごとに別の記号で示し、12月10日に確認した瀕死のカラス1羽の地点も地図(図1)に示した。

なお、死骸の観察・撮影や処理に関しては感染防止のため接触には十分注意したので、種の判別を行っていないものも多く、ここではまとめてカラス類として記述した。ただ、数字は出していないがハシブトガラスが大多数だったようである。また死骸の数について、頭部のみや翼のみのものについては、重複カウントの恐れがあるため、確認個体数には算入していない。

考察

カラス類では、巣立ち雛が巣立ちの時期に交通事故に遭って死骸として発見されることは少なくない。しかし春



●: 12月3~7日、◆: 12月9日、★: 12月10日 (☆は同日確認した瀕死の個体) ○: その他の日に死骸を確認した地点

図1 カラスの死骸および生体の確認地点

採湖の公園内には車道はなく、これまでもそのような死骸はほとんど見たことがない。2022-23年のシーズンに、合計で40羽もの死骸が見られたことはまさに異状であったと考える。その一部については行政による検査でHPAIであると発表されており、今回確認したカラスの死骸のほとんどのものがHPAIであったと思われ、瀕死の個体も神経症状を示していたことからHPAI感染と考えられる。

このシーズン中、道東地方での発生報告を見ると、10月8日に別海町内で回収されたガンカモ類の糞便からHPAIウイルスが検出され、10月下旬から多数のハシブトガラス、複数のオジロワシのほか、オオセグロカモメ、オオハクチョウで死骸あるいは衰弱個体がHPAI陽性と診断されている。また釧路管内では11月10日にタンチョウの症例が報告された。

ウイルス感染の経路については、オジロワシに感染が確認されていることから、カモ類などの感染鳥を採食することによりウイルスをとり込んだことが原因と推測されている。春採湖畔でも、カ



写真4 1月18日共食いの現場

ラスの死骸を別のカラスが採食しているところを確認しており(写真4)、こうしてカラスの間にHPAI感染が広がっていったのではないかと考えられる。12月中旬からは、感染の広がりを少しでも防止しようと考えて、できる限り死骸を回収・焼却処理した。死骸が集中していた理由について、その範囲は木立ちがあり、周囲の地形との関係で北風を防げると同時に朝日がすぐに当たることからカラス類のねぐらになっている。よって、カラスが集合する機会が多かったことが要因の一つと考えられる。

一方で、一般的にHPAIウイルスは秋にシベリア方面から南下してくるガンカモ類が国内に持ち込むのではないかとされているが、春採湖畔で10月5日に見つかった死骸(未検査)がもしそうだったとすれば、ウイルスの侵入経路や時期を再度検討しなければならないだろう。

幸いにも、今回流行があった春採湖周辺に養鶏場は存在せず、畜産業への影響はなかったと考えられる。しかし国外ではヒトへの感染例も報告されていることから、公園利用者への感染の危険も考慮しなければならない。

日本国内では以前から、HPAIの流行は数年おきと言われてきたが、最近は毎年流行する様相を見せており、その広がりが心配される。今後はまん延防止のために異常野鳥の発見や回収、迅速な検査の体制づくりが重要になると考える。本稿がそれを後押しするための一助になれば幸いです。